



「陸前高田被災地語り部 くぎこ屋」釘子 明さんの講演。

2015年11月24日、25日の2日間、岩手県盛岡市で「2015年度 つなごろうCO・OPアクション交流会」を行いました。

交流会は、全国の生協の参加者が東日本大震災の復興支援活動について意見交換し、今後の支援を考える機会となりました。

### 組合員・役職員93人が考え合う 復興のこれから

2015年11月24日、25日に、岩手県盛岡市のホテルイズで「2015年度 つなごろうCO・OPアクション交流会」を開催しました（主催…いわて生協・日本生協連）。この交流会は、これからの被災地とのつながりについて、参加者が共に考え共有することを目的としています。全国各地の23生協から、組合員・役職員93人が参加しました。

全体会では、「陸前高田被災地語り部 くぎこ屋」として震災の記憶を伝えている釘子 明さんの記念講演や、いわて生協、みやぎ生協、こぶふくしまから被災地の現状、こぶこうべによる阪神・淡路大震災からの復興へ向けての歩みなどの報告がありました。

陸前高田市の避難所の運営に携わっていた釘子さんは、「自分が避難する場所を知っていますか?」「その場所が本当に安全かどうか考えたことがありますか?」「その施設には、避難生活を送るために必要な備蓄や設備が揃っていますか?」と会場へ質問を投げ掛けました。だんだんと挙がる手が少なくなりました。

## 復興へ向け決意を新たに

### つなごろうCO・OPアクション交流会



田老町では、防潮堤から町を眺めました。



会場には全国の生協の復興支援の取り組みの展示も。



話が弾み、掃除モップ作りが進まない人たちも。



陸前高田市の滝の里仮設団地でのサロン活動。笑顔があふれる交流になりました。

参加者に向けて、常に防災の意識を持つこと、生活の場となる避難所の運営における組織づくりの大切さなどを訴えました。

コープこうべ 第3地区活動本部 本部長の高田忠良ただたよしさんは、震災後の地域のコミュニティについて「避難所から仮設住宅、そして復興公営住宅へと住む家が変わることは、くらしが変わるということ。くらしの変化に伴って人間関係が希薄になり、孤独死にもつながっています。地域のコミュニティをつくるには、ボランティアの力とその力を発揮できる場が地域にあることが大切です」と話しました。

この後の分散会では、4人〜6人のグループに分かれ、今までの自生協の支援活動の紹介や悩み、今後の復興支援について意見を出し合いました。支援に取り組む生協と受け入れる生協が交流することで、情報交換をしながら支援活動に取り組んでいくことが大切、という認識を共有しました。

### 交流会の学びを それぞれの地域へ持ち帰る

2日目の25日は陸前高田市コースと田老町コースに分かれ、被災地を見学。

陸前高田市コースでは、滝の里仮設団地を訪問しました。ここで、いわて生協は毎月2回、サロン活動を行なっています。この日は、ハンガーに毛糸を巻きつけてできる掃除モップ作りをお手伝いして交流しました。帰り際には、仮設住宅にお住まいの方からの「みんなが帰っちゃうと、急に部屋が寒くなるよ」という声に、「また来ます」と約束をする参加者の姿も見られました。

田老町コースの参加者は、防潮堤に上り、語り部プログラム「学ぶ防災」で、震災の記憶や教訓を学びました。

2日間の交流会を通して、参加者からは「自生協の支援が被災地域のニーズに合っているか不安だったが、被災された生協から『寄り添う気持ちは被災地に届いている』と聞いて、今後の取り組みに自信が持てた」「私たちはつい忘れがちになっ

てしましますが、被災地以外はまだ災害が発生していない『未災地』。防災教室などを開催し、意識を高めていきたい」「生協も一員となつて地域のコミュニティづくりを進めたい」といった感想が寄せられました。



分散会では、さまざまな生協が意見交換し、今後の支援について議論を深めました。



普段のサロン活動や仮設住宅でのくらしについてもお話を伺いました。

ですが、復興への課題は数多く残されています。震災の教訓や現状を学び、それぞれの地域で防災の活動を広めていくこと。そして、これからも全国の生協が手を取り合い、地域のさまざまな団体と協力して被災地の復興を応援していくことが求められています。